

鹿児島方言話者の語彙音調型選択について

太田一郎・竹村亜紀子*・二階堂整**

はじめに

鹿児島方言におけるアクセント変化は、窪菌（2006）、竹村（2010）、太田（2009, 2012）が述べるように、従来の二型アクセント体系内でA型とB型の所属語彙の入れ替え（A型語がB型音調で、B型語がA型音調で発話される）が生じている。これは標準語アクセントとの接触により生じた「ネオ方言」的現象（真田2011）と考えられる。竹村や太田は、養育者の方言や居住歴などの方言接触（dialect contact）を起こす要因との関連で、この音調面の変化をとらえようとしているが、それは変化をほんの一面から眺めるに過ぎず、さらに多くの要因がこの変化には関わっているはずである。

本稿はより包括的に鹿児島方言の変化を捉えるための試みの一部として、統計的手法により話者の社会的特性と選択される音調型の関連について検討する。

1. 調査の概要

本稿の分析対象は、2010年から2011年に札幌、福岡、鹿児島、東京で行った「複合アクセント句の音韻的従属（Prosodic Subordination in Multiple Accentual Phrase）の変異」に関する調査の一部である（太田ほか2012, Ota et al. 2012）。この調査自体は、複合アクセント句（MAP）における音調を主たる研究対象とするものだが、話者の言語能力の一部を確認するために語彙アクセントの読み上げも含めた。語彙の読み上げは、スライドを見せて語を発音させる方法とアクセント類別で並べた単語リストを発音させる方法のふたつで行ったが、今回取り上げるのは前者のみである。

1.1 語彙の選択と収録の方法

調査語彙は34語で、そのほか冒頭に練習用に3語を置いた。34語の内訳は類別語彙表（国語学会編『国語学大辞典』東京堂1980のアクセントの事項参照）から25語と、MAP調査に盛り込んだ語9語（青森、長野、お土産、飲み屋など）から成る。ここでの語彙アクセントの調査は、伝統的アクセント体系が保たれているかどうか（または、標準語化しているかどうか）を観察することが主眼であるため、類別語彙表を使用した。類別語彙表の中から、1) 各類それぞれ同じ数、2) なるべくなじみのある語、3) 二拍目が広母音と狭母音のものはほぼ半々という基準を考えて選抜した。結果として、各類から5語を選んだ。二拍目の広狭を考慮したのは、福岡でアクセントの型に関係する（稲川 1975）との記述や、各地でアクセントの型に二拍目の母音の広狭がかかわることがあるためである。

類別語彙の25語と音韻調査に出てくる9語の計34語を、乱数表を用いてランダムに並べ替え、バ

* 元国立国語研究所プロジェクト研究員

** 福岡女学院大学教授

ワーポイントに一語一語記載し、各語を読んでもらう方式をとった。今回の分析に使うのは冒頭での練習用の3語を除いたこの34語である。読みはすべて格助詞「が」を付けて読ませた。録音はMarantz PM661デジタルレコーダーに、オーディオテクニカATM75マイクロフォンで収録した。

(練習用語彙)

稲 花 みかん

(本調査用語彙：スライドでの表示順)

水 村 箸 雨 長野 青森 波 島 飲み屋 麦 竹 種 鳥 橋 雪 声 石 色 馬 船
おにぎり 猫 顔 宮島 海 秋 足 おみやげ 煮物 上野 牛 鶴 歌 煮魚

また、読みは方言スタイルと標準語スタイルのふたつのスタイルで収録した。以下の分析では、この両方のスタイルを分析用資料とした。方言スタイルでは、「ふだん家族や友人と話すように」、また標準語スタイルでは「知らない人と話すように」または「教科書を読むように」と指示をして単語を発音させた。¹

1.2 分析

本稿のおもな目的は、上述のとおりどのような社会的特性をもつ話者がどのようなアクセント型を使うか(使うことができるか)という現状をとらえることことである。そのため、出現したアクセントによりアクセント体系の変化を論じることはここでは行わず、出現したアクセントと話者の関係を数量的分析によって俯瞰的にとらえることを試みる。

1.2.1 出現した音調型とその数え方

鹿児島方言の語彙の音調にふたつの型があることは広く知られており、基本的にこの体系は維持されている(太田2011, 2012)。しかしながら、平山(1951, 1960)に挙げられた音調型は、窪菌(2006)などの指摘のとおり、それぞれの型で所属する語彙の入れ替えが進んでいる。そうすると、出現する可能性のある方言アクセントは以下の4種類が考えられる。

- (1) 平山(1960)の型と同じもの A型 B型
- (2) 平山(1960)の型と異なるもの AB型 BA型

(1)のふたつは従来の型が維持されているもの、(2)のふたつは従来とは異なる型で実現されたもの(つまり音調の型の入れ替えが起きたもの)である。

方言スタイルでは、この4種類以外にも標準語と同型の音調(下記A型(標準語と同型)、および

1 「教科書読み」は発話データとして妥当かという問題があるが、「知らない人と話す」という場面よりも標準語的音調が出てきやすいこともあるためである。

BA型(標準語と同型)), また標準語とも方言とも異なる音調(下記AB型およびBA型)があり, 合計6種類の音調が見つかったことになる。ただし, 「雪が(○●○)」のように, A型語は標準語音調と同じになることがあるため, 標準語と同じ音調のものと「水が(○●○)」のように標準語と異なるものは, 同じA型でも別の実現形とみなした。² 同様に, 従来のB型語がA型音調で実現したBA型も, 標準語音調と同じ「色が(○●○) < (○○●)」と標準語音調とは異なる「麦が(○●○) < (●○○)」も区別した。このように, 方言スタイルでは以下の8種類の音調に分けた。

従来型: A型 B型 A型(標準語と同型)
 入れ替え型: AB型 BA型 BA型(標準語と同型)
 非方言型: 標準語型 未知型(方言にも標準語にも一致しないもの)

一方, 標準語スタイルでは, 標準語音調とそれ以外の二種類に区別した。両スタイルを合わせて生じた10種類の音調型別に数をかぞえ, 第一段階の統計分析の入力とした。

読み上げ音声の収録では, 何度か読み直しをしていることがあるが, データとして取り上げたものは, 最初に読まれた音調型である。話者が直感的に選んだものという意味で, 最初の型をデータとして採用することにした。

1.2.2 話者

話者は鹿児島市を中心として, その周辺地域(薩摩半島)で生育した20代前半の若年層話者21名(男性11名, 女性10名)である。小学校入学前後を境に, それ以後鹿児島市内に居住している場合は鹿児島市生育とした。それ以外は鹿児島市以外生育としている。また, 親の方言が子の言語に影響する可能性は大いにあるが(cf. 竹村2010), 福岡県出身の両親を持つ女性1名以外はすべて鹿児島方言話者の両親である。ただし, 大隅半島は宮崎県に近い地域では二型ではなく一型アクセントであるため, 子の言語に影響を受けている可能性もある。大隅半島出身の親をもつ学生は2名いた。父親が旧末吉町出身の女性1名と母親が旧高山町出身の男性1名であるが, 以下で述べるように分析結果を見ると, 親の方言が影響を与えている可能性は低いと思われる。

生育地	性別と人数
鹿児島市	男性 5 名 女性 4 名 (うち 1 名は旧末吉町出身の父親)
鹿児島市以外	男性 6 名 (うち 1 名は旧高山町出身の母親) 女性 6 名 (うち 1 名は福岡県出身の両親)

表 1. 話者の構成

² ○は低音節(Low)を, ●は高音節(High)を表す。B型語は, 「雨が(○○●)」のように音韻語末の音節がHighとなり, 標準語の音調と同じになることはない。A型がB型音調に転籍したAB型も同様であるが, アクセント核がない(すなわち音調の下がり目がない)という意味では, 標準語の平板に対応する型と解釈することも可能である(cf. 窪田2006, 竹村2010)。

2. 統計による分析

2.1 各音調型の生起の度合い

表2はそれぞれの音調型がどの程度生起したかを平均値で表したものである。表中の「範囲」(最大生起回数と最小生起回数の差)で示すように、音調型により個人差はあるが、方言スタイルでは、A型B型などの生起が予想される方言的音調がすべて現れた。その一方で、予期されない標準語型、および方言型でも標準語型でもない未知型も一定数見られる。ただし、その生起する割合は音調型により異なる。表2を見ると、従来型のA型B型、および標準語と同じ音調になるA型(標準語同型)とBA型(標準語同型)の生起率は約45-70%と多いことがわかる。一方で入れ替え型のAB型、BA型が25%程度、さらに標準語型、未知型は10%以下の生起率であり、方言スタイルではあまり予期されない音調型が現れることは決して多いとは言えない。この数量的側面からは、少なくとも入れ替え型より従来型を自らの音調として、話者たちが意識しているように思われる(もちろん個人差はある)。

方言スタイル (34語)			
音調型 (範囲)	平均生起回数 生起率 (標準偏差)	音調型 (範囲)	平均生起回数 生起率 (標準偏差)
A型 (8)	5.33/9回 59.2% (2.941)	BA型 (14)	5.05/20回 25.3% (4.466)
B型 (20)	9.24/20回 46.2% (7.449)	BA型 (標準語同型) (6)	2.24/5回 44.8% (2.278)
A型 (標準語同型) (5)	3.43/5回 68.6% (1.568)	標準語型 (19)	3.29/34回 9.6% (5.676)
AB型 (13)	3.29/14回 23.5% (3.594)	未知型 (11)	2.10/34回 6.2% (2.773)
標準語スタイル (34語)			
音調型 (範囲)	平均生起回数 生起率 (標準偏差)	音調型 (範囲)	平均生起回数 生起率 (標準偏差)
標準語型 (17)	28.62/34回 84.1% (4.894)	未知型 (17)	5.38/34回 15.8% (4.894)

表2. 各音調型の平均生起回数と生起率 (話者21名)

平均生起回数はスタイルごとに各音調型の生起回数を合計し、話者数で除して算出

生起率は、平均生起回数を生起予想回数で除して算出

標準語スタイルにおいては、標準語型の音調が圧倒的に多いことから、標準語音調を操る能力が十分に高い話者が多いことが伺える。これらの結果には、鹿児島県の若年層話者は、必要に応じて方言音調と標準語音調を切り換えて使用する能力があることが示されていると言えるだろう。

表3は平山（1960）の音調型（すなわち従来型）が話者たちのあいだでどの程度維持されているかを表している。A型音調はA型とA型（標準語同型）の合計、BA型音調はBA型とBA型（標準語同型）の合計である。この結果を見るかぎり、従来型は入れ替え型より安定している傾向にある（約46%～63%）と言えるだろう（ただし、B型はA型ほど安定していない）。

従来型		入れ替え型	
A型語でA型音調で 発音されたもの (A型)	B型語でB型音調で 発音されたもの (B型)	A型語でB型音調で 発音されたもの (AB型)	B型語でA型音調で 発音されたもの (BA型)
185/294回 62.9%	194/420回 46.2%	69/294回 23.3%	153/420 36.4%

表3. 平山（1960）の音調型の維持（方言スタイルの合計714回のうち）

2.2 主成分分析

各音調型の生起は上記表2のような結果になったが、得られたデータの全体的な傾向と話者のあいだにどのような関係が見いだせるかを探るために、各音調型の生起数を入力とした主成分分析により、データを整理し直すことを試みた。表4はその結果である。主成分抽出の規準は固有値1以上としたところ、3つの主成分が抽出された。各主成分の寄与率は、第1主成分36.694、第2主成分26.647、第3主成分17.160で、累積寄与率80.501となる。

それぞれの主成分が何を表すかは、表4で示すとおり次のように考えられる。第1主成分は大きなプラスの値をもつのが「BA型（標準語同型）：.876」「A型（標準語同型）：.794」「BA型：.621」などの音調の下がり目をもつ有核語、大きなマイナスの値をもつものが「B型：-.929」「AB型：-.834」などの下がり目のない無核語である。そうすると、この主成分は「方言スタイルでの音調の下がり目の有無」を意味すると思われる。第2主成分は、「標準語型（標準語スタイル）：.737」「未知型（方言スタイル）：.538」「標準語型（方言スタイル）：.473」が大きな値を、「A型：-.839」「未知型（標準語スタイル）：-.737」「BA型：-.418」がマイナスの大きな値を示しているため、「標準語的音調の使用」を表すと考えられる。（ただし、要求されるスタイルに適切かどうかは問題ではない。）第3主成分は、「標準語型（標準語スタイル）：.659」がプラスの最大値を示すほか、プラスには「BA型：.380」「A型：.350」などが見られる。一方マイナスには、「未知型（標準語スタイル）：-.659」「標準語型（方言スタイル）：-.535」「未知型（方言スタイル）：-.451」と当該スタイルにおいて期待されない音調型が並ぶ。これらのことから、第3主成分の意味は「スタイルに適切な音調の選択」を表すと言える。このように、話者21人のデータはこれらの3つの次元により構成されるものと考えられる。

音調型	成 分		
	1	2	3
A 型 (方)	.126	-.839	.350
B 型 (方)	-.929	-.195	.140
標準語型 (方)	.498	.473	-.535
A 型【標同】	.794	-.059	.247
BA 型【標同】	.876	.234	.106
AB 型 (方)	-.834	.300	-.020
BA 型 (方)	.621	-.418	.380
未知型 (方ス)	.240	.538	-.451
標準語型 (標)	-.061	.737	.659
未知型 (標)	.061	-.737	-.659
固有値	3.669	2.665	1.716
寄与率	36.694	26.647	17.160
累積寄与率	36.694	63.341	80.501

表 4. 各音調型と抽出された主成分

注：(方) は方言スタイルを、(標) は標準語スタイルを、【標同】 は方言スタイルでの標準語同型を表す

では、これらの次元に話者たちはどう関わっているのだろうか。主成分分析による得点をプロットした散布図（図 1）を見て考えてみたい。第 1 主成分については、起伏型（下がり目のある）音調が多く生じた者がプラス方向に、平板型（下がり目のない）音調が多く生じた者がマイナス方向に位置している。第 2 主成分では、プラス方向に標準語的音調が多い者が、マイナス方向に標準語的音調が少ない者が位置づけられている。どちらの次元を見ても、男女、異なる生育地の者が混じり合い、目立った傾向は見られないので、これらの次元に関する理由は別の話者要因の点から検討すべきと思われる。

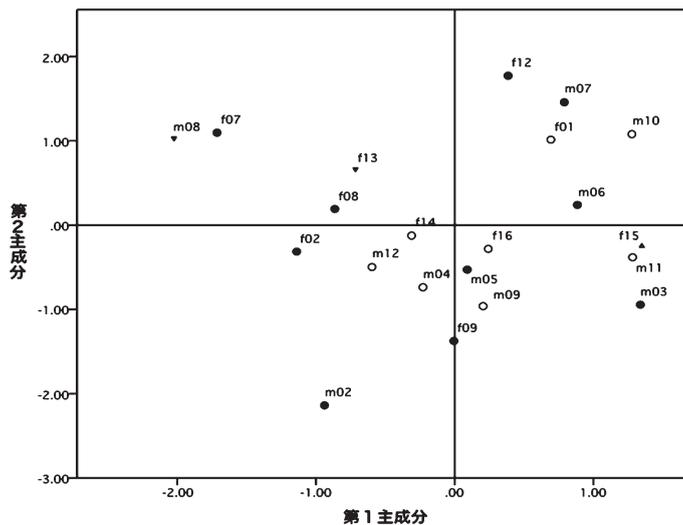


図 1. 第 1 および第 2 主成分と話者

注：m = 男性, f = 女性, ○ = 鹿児島市生育, ● = 鹿児島市以外生育,
▼ = 親の方言が大隅半島の者, ▲ = 親の方言が鹿児島県外の者

次に第3主成分を加えた図2の結果を検討してみたい。第3主成分ではプラス方向がスタイルに適切な音調の選択が行われていることを、マイナス方向ではその選択が適切ではないことを表わしている。図2を見ると、この主成分については他のものにくらべて話者特性との関係を少しはっきりと見ることができる。プラス方向には鹿児島市生育の者が多く、マイナス方向はほとんど鹿児島市以外生育の者である。つまり、鹿児島市の話者たちは、自らが操る音調型に関する意識が高く、スタイルの違いに応じて音調型をうまく使い分ける傾向にあると言える。鹿児島市以外生育の話者でも、m03やf08のように、同様の傾向を示す者もいるが、全体的には鹿児島市生育話者ほどではないようである。このような傾向は、鹿児島市内の方が周辺地域より鹿児島方言以外と接する機会が多く、音調の使い分けに慣れていることに起因するのではないかと推測される。³ ただ、主成分分析では話者と音調の関係についてはこの程度としかわからない。もっと精密な話者特性との関連を追及する必要がある。

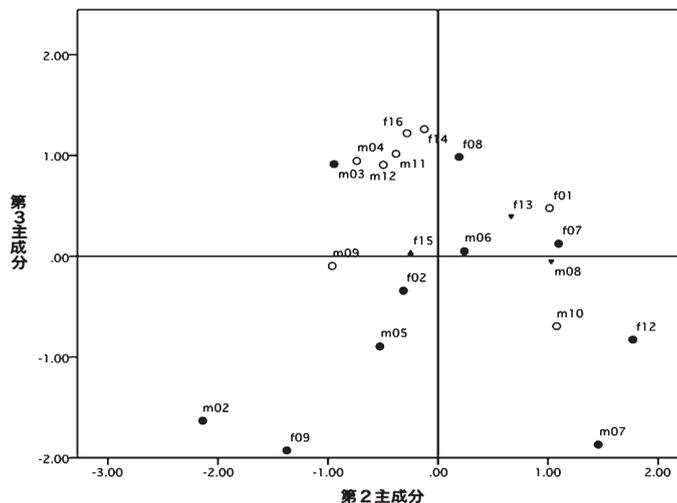


図2. 第2および第3主成分と話者

注：記号の意味は図1と同じ

2.3 話者のパーソナリティと音調型の関連

MAPの変異に関する研究では、話者の社会的特徴として、性別、主な生育地、親の方言のほかに、話者のパーソナリティに関する情報を集めている。これは、ビッグ・ファイブと呼ばれるパーソナリティの「特性5因子」の概念モデルによる（ネトル 2009）。その5つの因子は次のとおり。

³ 太田（2009）は、鹿児島市内には毎年一定量の鹿児島方言以外の地域からの人口流入があることを指摘している。また、白勢（2007）では、鹿児島市の幼児は小学校に上がると、方言的特徴を使わなくなる傾向が見られることを報告している。

	パーソナリティ次元	高スコア者特徴	低スコア者特徴
因子	外向性 Extraversion	社交的 ものごとに熱中する	よそよそしい 物静か
	神経質傾向 Neuroticism	ストレスを受けやすい 心配性の傾向	情緒的に安定
	誠実性 Conscientiousness	有能 自己管理できる	衝動的 不注意
	調和性 Agreeableness	人を信頼する 共感できる	非協力的 敵対的
	開放性 Openess	独創性・創造力に富む エキセントリック	実際の 因習的

表5. ネットル (2009:37) のビッグファイブ・パーソナリティ次元概要

注：筆者による改作を含む

バリエーションの使用には、スタイルの異なりなどの社会状況的要因だけでなく、言語意識など心理的要因も影響を与えるが (Labov 1972), パーソナリティも同様にバリエーションに影響を与えると考えられる。本稿では、これらの5因子構造のパーソナリティと前節で抽出された各話者の主成分得点との間にどのような関係が見られるかを、話者の性別と生育地を含めたモデルで重回帰分析により検証した。⁴ モデルの変数の選択は変数減少法による。パーソナリティのデータは数値データだが、性別と生育地は名義データのため、男性および鹿児島市を1とするダミー変数とした。表6はその結果である。

第1主成分に関しては、生育地が $p < .10$ で有意傾向、そのほか神経質傾向、誠実性、調和性、開放性が有意である。この結果から、「下がり目のある音調」は、自己をコントロールし、他人に対する共感また創造的行動力もつ人に使用が多い傾向と言えるだろう。また、それは鹿児島市内で育った人の方がややその傾向が強いようである。標準語の使用に関わる第2主成分だが、係数 β は神経質傾向がプラスで、外向性、誠実性、調和性はマイナスであることから、ナーヴァスな精神性で外部との協調が上手く行きにくい人に標準語型の使用が多い傾向があると思われる。最後に、第3主成分である「適切な音調の選択」は、生育地、外向性、神経質傾向、誠実性、開放性が有意である。そのため、社交的で自己コントロール力や創造性をもつが、周囲の評価もやや気になる人がより音調型を適切に使い分けるようである。また、性別は係数がプラスで有意傾向にあることから女性よりも男性の方にやや使い分ける傾向が見られるようである。

4 「親の方言」はデータに偏りがあるため、モデルには含めなかった。

独立要因	標準化係数 β (第1主成分)	標準化係数 β (第2主成分)	標準化係数 β (第3主成分)
性別	n.s.	n.s.	.082 †
生育地	.114 †	n.s.	.197**
外向性	n.s.	-1.039***	.811***
神経質傾向	-.273**	.123***	.246**
誠実性	1.082***	-.585***	.656***
調和性	.129*	-.261**	n.s.
開放性	.952**	n.s.	1.333***
モデル (自由度)	F= 98.466*** (5)	F= 505.945*** (4)	F= 99.470*** (6)
R ² (調整済み)	.961	.990	.967

表6. 各主成分と話者要因パーソナリティの関連

† = p. < .10, * = p. < .05, ** = p. < .01, *** = p. < .001

これらをまとめて鹿児島市の音調型使用の現状を考えてみることにしたい。下がり目のある音調は、標準語音調と同型になるなど、標準語と共通性が多い。言いかえれば、下がり目のある音調を使う話者は、二型アクセントの特徴をのこしながら従来型の鹿児島の音調から離れて行きつつある者ととらえられるかもしれない。また、音調型の適切な使い分けをする者も、因習的なものにはむしろ固執しないで、他人と交わり新しいものを求めていくような志向性が感じられる。その一方で、標準語中心の音調を使う者は、ことばや文化的側面に見られる従来の鹿児島の要素に対して、また鹿児島の特徴を引きずる自分自身に対しても否定的な意識をもっているため、標準語への志向が強くなるのかもしれない。

3. おわりに

鹿児島方言の音調は、従来の音調型と音韻規則を残しながらも変化が進んでおり、若年層の間での個人差がだんだんと広がりつつある。これまでは性別、年齢、地域等の話者属性との関連での議論が中心であった言語変化の問題も、話者がもつ様々な社会的、心理的側面を考慮しながら検討されねばならない。本稿の議論はその一部であるが、今後は他に収集した話者データによる検討を進める予定である。

* 本稿の研究は、平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究B「北海道、福岡、鹿児島方言に見られる音調句の言語変化に関する社会言語学的研究」(課題番号:21320076) および平成24-26年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「メディアの影響を組み込んだ言語の習得と変化に関する理論モデル構築の試み」(課題番号:24652082) による成果の一部である。

参考文献

- 稲川順一 (1975) 「筑前方言のアクセントについて」『語文研究』 38, pp. 38-47, 九州大学国語国文学会
- 太田一郎 (2009) 「九州における言語の危機と話し手の意識」月刊『言語』 Vol.38, No.7, pp.32-39, 大修館書店
- 太田一郎, 高野照司, 二階堂整, 宇都木昭, 朝日祥之 (2012) 「日本語方言の音調変異について」*Japanese Language Variation and Change (JLVC)* における研究発表 2012年 3月20日 国立国語研究所
- 太田一郎 (2011) 「各地方言の実態—方言の現在—⑥九州」真田信治 (編著)『方言学』 pp. 104-122, 朝倉書店
- 太田一郎 (2012) 「日本語のメロディを考える」日比谷潤子 (編著)『はじめて学ぶ社会言語学』 pp. 155-175, ミネルヴァ書房
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』 岩波書店
- 真田信治 (2011) 『方言学』 朝倉書店
- 白勢彩子 (2007) 「幼児の単語アクセントの聴取に関する方言比較による検討」『音声研究』 11(3) 55-68, 日本音声学会
- 竹村亜紀子 (2010) 『方言習得における親の母方言の影響』 博士論文神戸大学大学院人文学研究科
- ネットル, ダニエル (2009) 『パーソナリティを科学する』 白揚社
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 學界之指針社
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』 東京堂出版
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Pennsylvania University Press.
- Ota, Ichiro, Shoji Takano, Hitoshi Nikaido, Akira Utsugi, and Yoshiyuki Asahi (2012) *Sociolinguistic Variation in the Pitch Movement of Japanese Dialects*. Paper presented at NWAV Asia-Pacific 2, 2nd August, 2012 (at NINJAL, Tokyo).
- Ota, Ichiro and Shoji Takano (under review) *Media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts*. In Jannis Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and sociolinguistic change*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Stuart-Smith, Jane, and Ichiro Ota (under review) *Media models, 'the shelf' and stylistic variation in East and West: rethinking the influence of the media on language variation and change*. In Jannis Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and sociolinguistic change*, Berlin: Mouton de Gruyter.